

# News Letter

公益財団法人 集団力学研究所 No. 56 2013.7.14

ホームページ <http://www.group-dynamics.org/>

## ごあいさつ

代表理事（所長）杉万俊夫

昨年 12 月にニュースレターの前号を出版しましたが、それから約半年が経ちました。昨年 3 月に移転した博多百年の町屋「高橋邸」での活動も、次第に板についてきたように感じます。

ひとつ大きなニュースがあります。本年 4 月、京都大学に「デザイン学大学院」という新しい大学院プログラムが誕生しました。デザインと言っても、衣服、家具、電気製品のような製品（プロダクト）のデザインではなく、「社会システム」をデザインできる人材を養成することが目的です。ハード（機械や建築）、サイバー（情報）、ソーシャル（社会）の専門性を総結集し、学際的・国際的な感覚で新しい社会の仕組みを構想できる人材を育てようというわけです。

私は、上の 3 つのうちのソーシャルの側面から、とくに、組織とコミュニティのデザイン教育を担当しています。そのような教育には、学生に実習やインターンシップの場を与えることが必要です。そこで、集団力学研究所を、「京都大学デザイン学大学院：博多サテライト」にすることを提案し、承認されました。若い大学院生諸君とともに、集団力学研究所を一層活気あふれる空間にしていく所存です。

最後に、出版活動について、2 つ紹介します。本年 4 月、拙書「グループ・ダイナミックス入門：組織と地域を変える実践学」（世界思想社）を出版しました。本の帯には、「常識を超える集団論」とあります。高校生にも読めるように書いた入門書ですが、同時に、私自身の研究の集大成でもあります。もう一つ、私どもの研究所で刊行してきましたジャーナル「集団力学」が、電子ジャーナル・データベース「J-STAGE」（独立行政法人：科学技術振興機構）に掲載されることになりました。組織やコミュニティの具体的な実践を報告した論文が掲載されています。だれでもアクセスできます。

## 小特集：「地域塾」活動報告

町屋に引っ越した集団力学研究所、その新しい活動の柱のひとつが「地域塾」です。まちづくりの理論と実践を学び、コミュニティの活性化に寄与することを目指した活動は、月 1 回の例会を中心として順調に回を重ねてきました。単発の学習会だけでなく、継続して学び、あるいは実践に参加する、長期的な活動にも取り組みを深めています。関心を寄せていただく方も増え、お問い合わせをいただいたり、新たにメンバーに加わっていただいたり、どんどん賑やかになってきました。

今回は、地域塾メンバーの関わっているまちづくり・地域活性化活動のレポートを2件、短信を2件ご紹介します。

## レポート1

### 「駅前町内会（福岡市東区K校区）の挑戦（承前）」

地域塾 塾頭 服部 正

K小学校区は人口1万7千人（8300世帯）と福岡市東区で最も住民が多く、3つの大学とひとつの高校を抱える文教地区。東に立花山を望む旧農村地域と、西の博多湾に面する住宅地が一緒になった、どこにでもあるような普通の校区です。

そのK校区内にある26の町内会のひとつ「駅前町内会」は、3年前から「町内会改革」に取り組んできました。古くからの幹部が町内会を牛耳る構造を脱却し、本当に必要な活動に予算と時間を集中させ、透明でみんなが参加できる町内会を目指す試みについては、前回のニュースレターでもご紹介しました。今回は「町内会改革・奮戦記」の第2弾です。

ことの始まりは、K校区全体に存在する「町内会連合会」と「自治協議会」の二重構造の矛盾に気づいた「駅前町内会」が、昨年春に「連合会」を離脱したことでした。8年前の福岡市の改革で、校区での活動は「自治協議会」による柔軟・機動的な運営に一元化されたはずでした。しかし、廃止されたはずの「町世話人制度」の流れをくむ「連合会」、その古手幹部が、旧態依然とした運営を行っていたのです。

「駅前町内会」が「連合会」を離脱したことに対し、校区の自治会組織の幹部連中が猛反発、現代版の「村八分」が始まったところまでが、前回の報告でした。今回はその後広がった波紋の報告です。

当初「離脱」を認めていなかった「連合会」は、秋になると態度を一転して「除名処分」を通告、さらに「自治協議会」からの「排除」まで示唆してきました。さらに、「連合会」の幹部が牛耳る「自治協議会常任委員会」でも、「駅前町内会」を「自治協」からも排除することを決定しました。「駅前町内会」には正式の通告がないままの一方的なやり方です。

これら一連の動きに対して、福岡市の見解を尋ねてみました。「本来自治協議会に排除の論理はないが、住民自治の問題なので行政の直接介入は難しい。370万円の補助金の使途におかしい事業があれば行政指導する」というやや腰の引けた答えでした。

今年4月、「駅前町内会」の会長が「自治協議会」の総会に出席したところ、自治協幹部は「傍聴は出来るが、発言権はない」との切り口上。「これは常任委員会で決定しており、総会の承認はいらぬ」との発言に至っては一方的もいいところで、あきれかえるばかりです。さらに、「自主防災組織」からの排除、「人権尊重推進協議会」では委員の資格をなくす等の事実が判明、「村八分」はエスカレートするばかりとなっています。

「駅前町内会」では役員会でこの問題の対応を協議しました。その結果、「民主主義・自治の原則からすると問題ありと考えるが、町内の住民生活に実害が出ているわけではないので、当面は静観の態度を取る」との決定をしました。

「連合会」の幹部は70～80歳代の老人がほとんど。このような独善的で、排他的な対応を続けると、そのうち校区の町内会活動にだれも近づく人がいなくなるということに気がついていないのが、本当になげかわしい限りです。

100世帯を切る小さな「駅前町内会」は、これからも「楽しく、身の丈にあった町内会活動」をモットーに活動を続けていきます。

これからの事態の推移はまた次の機会に・・・

## レポート 2

### 「西鉄久留米駅東口エリアの復活に向けて」

地域塾 安川 博

久留米市は福岡県で第3の都市（人口 30 万人）です。筑後地方の扇の要に位置し、筑後川の豊富な水資源や耳納連山の植生など自然環境に恵まれ、充実した医療施設、九州高速縦貫道及び横断道に隣接した便利な交通網など、生活にも大変便利で子育てしやすいエリアとして評価が高まっています。

江戸時代は有馬藩 21 万石の城下町として栄え、戦前は軍都、戦後はモータリゼーションの急速な発展に伴うブリヂストンを代表とするゴム製品の街、商業の街として発展しました。

しかし、バブル経済崩壊後は、少子高齢化、郊外道路網の整備に伴う郊外大型ショッピングセンターの出店、無店舗販売・インターネットショッピング等の普及など、社会及び経済の環境は大きく様変わりしました。久留米市中心市街地で威容を誇り、筑後随一と言われた多くの商店街は、他の地方都市と同様、寂れていく一途となってしまいました。

久留米市の表玄関の一つである西鉄久留米駅とその東口は、昭和 40 年代後半（1970 年代）に再開発され、百貨店、ファッション専門店ビル、ホテル、飲食街など様々な店舗が集積し、筑後地方随一の商業エリアへと発展し、久留米岩田屋百貨店は 300 億円を超える年商を誇り、全国百貨店にその名を知られる存在でした。

しかし、1990 年代半ばを境に西鉄久留米駅の乗降客数は年々減少し、現在の久留米岩田屋の年商はピークの 40%という状況となっています。

この現況から、西鉄久留米駅東口を再び活気ある街とするために、平成 24 年春西鉄久留米駅東口エリアで事業を営む有志の方々が「西鉄久留米駅東口活性化委員会」を立ち上げ、活動をスタートさせました。この活動には、久留米商工会議所や久留米市役所も全面的な支援を行っています。

平成 25 年 6 月には、西鉄久留米駅東口活性化委員会は、一般社団法人「We Love 久留米協議会」を発足させ、対策の検討段階から具体的な実践段階へと活動を進めて行くことになりました。

集団力学研究所では、西鉄久留米駅東口活性化委員会と設立当初から関わりを持ち、各会合にオブザーバーとして参加してきました。歴史と自然に恵まれ、数多くの医療施設もある久留米の「活性化」、端からはぜいたくな悩みのようにも見えます。しかし、人口が縮小する時代にどのような町のビジョンを描くか、志のある人材をどう繋ぎ、どう生かしていくかという、多くの地域と共通する課題も見えてきました。研究所にも、すぐに使える資源やアイデアがあるわけではありません。しかし、久留米で活動する皆さんの刺激になるよう、地域塾メンバーの経験や人脈を生かそうと考えています。

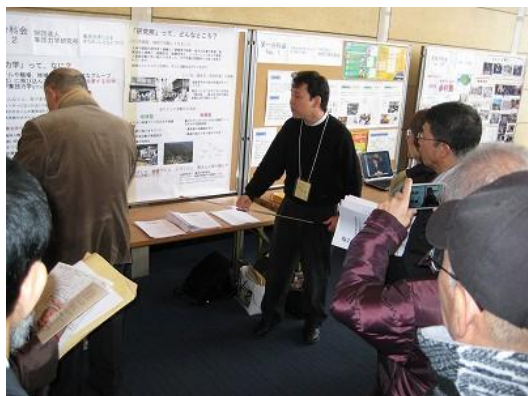
We Love 久留米協議会の本格的な活動に伴い、今後「地域として一体感のある街づくりの推進」のため、地域コミュニティの構築、活動推進の組織づくりや人づくりなどの取り組みに連携していきます。

## 短信 1

### 「夢追いサミット」参加

2013 年 2 月 23 日（土）、北九州国際会議場で行われた「夢追いサミット」に、集団力学研究所と地域塾のメンバーも参加してきました。人口減少と高齢化の時代、北九州市は行政が積極的に支援して、地域を担う人材を養成する「生涯現役夢追い塾」を推進してきました。市政 50 周年を記念して、塾の卒業生を中心とした NPO やまちおこしグループ

が集まって成果や活動を発表するサミットが開催されたのです。全国から集まった 40 近くの団体とともに集団力学研究所もポスター発表し、地域塾をはじめとする地域づくり・人材育成の活動と、それを支えるグループ・ダイナミックスの考え方を紹介しました。



## 短 信 2

### 最近の地域塾

6月の例会では、新塾生の近藤乃梨子さん（鳥取大学大学院）から、「楊貴妃伝説で村おこし：山口県の小さな漁村にある真言宗寺院の住職を中心に始まった取組み」と題して発表をいただきました。本州の西北端、長門市油谷向津具（むかつく）には、唐の玄宗皇帝の後・楊貴妃が、難を逃れて漂着、没したという伝説が古くから語り伝えられています。バブルの時代、この伝説を生かした地域づくりに巨費が投じられましたが、成果は思わしくありませんでした。しかし、知恵と志をもったメンバーによって、「楊貴妃炎の祭典」という新たな取組みが始まりました。地域を動かす熱気を帯びた活動、稿を改めて詳細をご紹介しますできればと思います。

## 連載

### 集団力学研究所 大浜参入記（その2）——入居からお披露目まで

研究所を百年町屋に。杉万所長のアイデアは突拍子もないものに思えました。しかし、町屋・高橋邸の今後に心を痛めていた家主の大塚夫人に快く承諾をいただき、引っ越しはとんとん拍子で進みます。大浜地区での暮らしが始まる連載第2回です。

---

#### 入居からお披露目まで

ハカタリバイバルプランの立石が仲介役となって、研究所の移転話はすぐにまとまった。高橋邸2階奥の一室を改修して研究室の事務所として使用することになり、オフィスとしては格安と言って良い賃料で契約が結ばれた。改修だけでなく修理の工事も必要だった。これまで何度も研究会が行われ、高橋邸の大きな魅力ともなってきた2階の大広間も、天井板の全面的な張り替えなど大規模な修理が必要だった。昔ながらの工法の難しい作業だったが、リフォームも破格の費用で済んだ。仲介した不動産業者もリフォーム業者も、杉万所長の同窓生という間柄。関係者全員、これで儲けようとも思っていなかったが、結果的には全員が納得し満足のいくかたちで話が進んだ。昔ながらの、あるいは本当の意味での「談合」「商い」になったのかもしれない。

2012年3月に機材の引っ越しが行われ、集団力学研究所は晴れて、天神のオフィスから博多百年町屋に引っ越した。もともと、引っ越しには誤算もあった。改修されオフィス仕様となったものの、部屋へのアクセスは昔ながらの急な階段で、廊下の幅も狭い。以前の研究所で使っていた大型のプリンターなどは搬入できず、小型のものに急遽買い換えなくてはならなかった。

大浜地区の方々にも、引っ越しの披露をすることになった。昔ながらの町内、きちんとご挨拶をする必要があるだろうということになり、町内の方々を座敷にお招きして会を設けることになった。どうせやるのならきちんと格好をつけてやろう、こういう時はやはり紅白まんじゅうだと、研究所のメンバーも盛り上がった。大浜地区にはなぜかおまんじゅう屋さんが多い。博多港と目と鼻の先にあるこの地区は、港湾労働者の出入りも多く、そうした人々のお腹を満たすために、たくさんのおまんじゅう屋さんが立ち並んでいたのだという。高橋邸前の通りも、戦前は港へ通じる幹線だった。お菓子の工房と卸をしていた高橋邸もそうした賑わいの中にあっただ。

しかし、紅白まんじゅうなら華やかだし値段も安いだろうという研究所のもくろみは、あっけなく頓挫した。おまんじゅうならひとつ百円ぐらいで済むのでは、などと皮算用をしていたら、贈答用品は箱だけでも百円以上、そんな格安ではとても無理と判明。結局、近所のお饅頭屋さんで、正式に折り詰めのお赤飯を注文し、披露会で皆さんにお配りすることになった。

2012年6月16日の夕方、2階の座敷に座布団を並べ、町内の方々をお迎えして引っ越しのご挨拶会を開いた。土曜の夕方で残念ながら所用で欠席される方も多く、数名のご参加にとどまった。それでも、大浜地区の自治協議会長や公民館長にご参加をいただいた。杉万所長から研究所の紹介も行われた。

座敷での懇談は、自然と大浜地区の状況、まちをどう活性化するかという話題になった。大浜地区もマンションが増えていて、住民同士のつながりが乏しくなっている。子ども会の参加も半数程度など、地域の悩みが縷々紹介された。その一方、公立の特別支援学校高等学園が地区に移転してくるなど、さらなる変化の予感もあった。住民として、研究所も町の悩みに向き合っていくことを表明した。折り詰めのお赤飯は、欠席されたお宅にもすべて配られていった。

研究所は町内会にも入会し、山笠にもご寄付をした。2012年7月14日(土)、関係者に向けた引っ越しのお披露目会を行った(詳細は前号)。同日午後には、恵比寿流による「流昇」で、研究所前の細い通りを山笠が駆け抜けていった。

その夕刻、片付けを終えた高橋邸の1階土間にテーブルを出し、夕涼みがてら所員でビールを飲んでいると、恵比寿流の皆さん十人ほどが締め込み姿でご挨拶に訪れた。ご寄付のお礼と、昼間の「流昇」のご挨拶とのことで、凜とした博多三本締めをしていただき、思わずこちらも頭を下げる。住民になって初めて知る、山笠の一面だった。

